

研究ノート

新架蔵「慈恵大師講式」の紹介

辻彦三郎
林幹彌

本所が昭和四十七年度購入した図書中に「慈恵大師講式」断簡一卷がある。「慈恵大師講式」と称する講式は多数伝るけれども、本巻には奥書が具備しており、それによって鎌倉初期の天台座主でかの「愚管抄」を著した慈円が草したものである点と、それを成源律師に清書せしめたものである点とに特徴がある。左に奥書を示そう。

慈円、忍不見昔之心、超猷見今之思、仍述大師讚嘆之詞、顯弟子懷旧之志也、
建保二年七月、以成源律師令書写也、去年草之也、

この場合慈円と成源との間柄を法系によって説明できるかどうか。あまり詳かでないというべきであろう。慈円の俗系については云々するまでもないので、成源のそれを検するとしよう。

〔尊卑分脈〕藤原氏
顯隆卿等孫

成頼

忠頼

山權僧正、法務、
成源母
成円法印

これを『華頂要略』百四十五所収の諸門蹟伝六中絶之部に載せる延暦寺実乘院の条を見ると、成源權僧正の説明として、「始諱良尊、号成嚴、藏人忠頼男、成円法印甥、慈円和尚、成円法印等資、」とあるところから、慈円と成源との側面を知ることができるが、青蓮院現蔵の文永元年十二月廿五日付の「成源澄澄尋伝法灌頂印信」には、観性―成円―成源―澄尋の如くあり、慈円との法系はうかがえないし、同じく青蓮院蔵の「遮那業血脈譜」にも記載されていないのである。

従って慈円と成源とのつながりを知るには前掲華頂要略の成源の条に加えて成円の条に「奉仕慈円大僧正」とあるのによるべきであり、成円の存在を無視できないと考える。

さて奥書の筆蹟はその冒頭に慈円とあって筆者は自明である。すなわち慈円は藤原忠通の息であって、その書風は勢い忠通の法性寺様を汲むものであり、本奥書もそれを立証している。従って慈円に書写を依頼された成源の筆蹟にも慈円の書風に類似したところが認められるといつてよい。

慈円はこの慈恵大師講式を特別な意図の下に草したのであるかどうか詳かでないが、建保元年に草して翌年の七月になって成源に清書せしめたことを語る。そのことは本巻とはべつに慈円自筆の本講式の草案の存在したことを考えしめるのであって、今後それが世に出でるとなれば、本巻の価値も一層重要なものとなるであろう。

「慈恵大師講式」は、京都大原の勝林院所蔵の『魚山叢書』のなかに、多数収録されている。そのなかの一つが、恵心僧都源信の作と伝えられているのである。それは『恵心僧都全集』第五卷に収載されている。『魚山叢書』のものは、源信作と伝えられるものも含めて、いずれも短いもので、しかも、その書写年代も比較的新らしいものが多い。したがって、これらのものと、ここにいる、新たに本所に架蔵された慈円の作にかかると「慈恵大師講式」との関係は、全く認められない、といつてもよからうかと思われる。

このほかに、大原三千院の円融蔵に後宇多天皇作といわれるもの、吉祥院南溪蔵に覚超作といわれるもの、などが『国書総目録』に見えている。しかし、『魚山叢書』以外のものは、未だ実見していない。

なお、京都青蓮院吉水蔵に、大永七年尊鎮親王書写のものがあることが、同じく『国書総目録』に見えている。青蓮院については、本所では昭和二十五年から三十一年の間に、前後九回にわたって採訪を行なった。その成果の一部が四十六冊の『青蓮院聖教』となつて、本所に架蔵されているが、そのなかに、『国書総目録』にいう尊鎮親王書写のものは見当らない。あるいは、この尊鎮親王書写のものが、新架蔵の慈円作のものを書写したものでなからうか、と推測される。これが推定の如くであるとすれば、新架蔵本の前欠の部分の復原も可能になるわけである。しかし、まことに挙げたような事情から、現在のところは、如何とも為し難い。

さて、この新架蔵の講式は三段から成り、その端を欠き、第一段の中途の

公ツツ心ツツ仁ツツ僧ツツ都ツツ之ツツ教ツツ命ツツ、怒ヒ雖ヒ既フ、詞ツツ林ツツ之ツツ花ツツ、和ツツ尚ツツ赴ツツ維ツツ摩ツツ堂ツツ之ツツ講ツツ席ツツ、敢ツツ無ツツ滯ツツ、懸ツツ河ツツ之ツツ波ツツ、凶ツツ侶ツツ跪ツツ路ツツ、投ツツ杖ツツ叉ツツ手ツツ、維ツツ摩ツツ弁ツツ在ツツ衡ツツ婦ツツ洛ツツ都ツツ告ツツ相ツツ國ツツ、貞信也
という条から見えてゐる。長元四年九月十九日の奥書がある「慈恵大僧正伝」に、

承平七年、隨興福寺維摩會講師基増、行向彼寺、于時、勅使左中弁藤原在衡議曰、講匠者台山之善徳也、所伴威儀僧、又竜鳳之侶也、当寺学徒是鶖子之才也、講各決雄弁、宣明佛法之冲旨、因茲、南北学徒各抽四人、和尚即其一人也、当初、南都有義昭法師者、学中英傑也、弁論之道、古今希類、和尚与義昭、諸人僉義為第一番、義昭誇一鶚之才、有独歩之心、謂云、我年臘共長、与少僧不可論難也、時仁數僧都為学道之長、知人之鑑見称時輩、廉直之性有如皎日、私招義公辟咄告曰、良公當時俊才、将来必可為國宝、推為一雙、最得其宜、義昭忽応仁僧都之詞、更膏弁論之脣、問答之旨、玄之又玄也、和尚親論談席、南都悪僧裏頭、横杖邀之行路、皆曰、義公者南都之偉器也、汝何相敵矣、天不可階、蓋此謂歎、若詞語不明、理趣不尽、則將加杖木令知止足之分、及聞和尚懸河之詞、凶暴之侶、咸跪路畔、投杖叉手、還悔前過、在衡婦洛之後、詣大相國府、歎美和尚之才弁、

と記されている。講式はこれによって文を為したものと、思われる。すなわち、講式にいう、「公」とは義公すなわち義昭をさし、「仁僧都」とは仁數のことである。講式のこの条は、慈恵大師良源が史上に名を留めた最初の出来事を、「慈恵大僧正伝」によって記したものである。

「慈恵大僧正伝」のこれ以前の記事は、良源の出自・誕生・幼時の逸話・比叡登山・出家を挙げてゐる。その分量は全体の約十分の一である。これから考えると、講式の前欠の部分は、一紙、多く見積つても二紙ほどに過ぎないものではなからうか。

すなわち、講式の第一段は、良源の生前の事績を、「慈恵大僧正伝」その他の史料を駆使して、述べてゐる。そのなかで、広学堅義・内論義の設置を挙げ、源信・寛超・寛印・安海らの俊秀が生れたことを説き、「我宗中興、偏在和尚」と記している。また、堂舎の創建・再建から行基以来の大僧正補任に及び、「凡我山越諸寺、我宗勝、諸教、和尚化現方便之所感得也、(中略)観自在、彼三十三身之一身、遠聞聖徳太子之悲願、此十九説法之一化、近在慈恵和尚之利物、」と説

く。

第二の「滅後利生」の段では、「除鬼魔於山中、弘三宝於七道、凶真影於国郡、退悪於一時、」と魔除の大師の効能を説き、「広学堅義之始、学徒成群練習、今率其跡称四季之講會、讀五部之大乘、待花聞鳥、叮四教之疑闕、見月凌雪、開三觀之門戸、迎季之思知節之志、于今未懈緩、菩薩・声聞在世之請問、迦葉・阿難滅後之結集、竜樹・天親、論家之義、天台・妙楽已証之釈、山家将来之秘決、唐院伝燈之口受、悉載論談之舌、併尺問答之詞、(中略)列我山住侶、聞和尚遺法、滅後利生、已如教主哉、而釈迦、遠和尚近、」と、良源の教学興隆の事績を釈迦になぞらえてゐる。さらに、「蒙餘慶、連綿無絶」いことから、「世々生々必報大師恩徳」と記して、この段を終えてゐる。

第三の「廻向功德」の段では、「大師昼夜守護給、我願既滿、大師朝暮擁衛給、衆望亦足」とし、大師の擁護を祈り、「仰願、慈恵大和尚、為遺弟、除却天魔・人魔、速成就興隆之大願、為弟子哀愍、今世・後世必円満、出離之本懐、」と記して、ほぼこの講式を終つてゐる。

この講式は、慈円の遺文として貴重なものであることは、いうまでもない。さらに、その内容のうえからも、今日まで遺されている元三大師(良源)に対する信仰の、もっとも古い姿を見得る点において、極めて重要な史料ということができよう。(なお講式の原文の引用は、オコト点を省略した。)

下郷共済会所蔵の「経光卿記」

石田 祐一

下郷共済会所蔵の「広橋文書」三十五巻の内容は広橋家に鎌倉時代以来伝わつた記録・文書その他である。

周知の如く広橋家の大量の蔵書は維新の後に岩崎氏の有に帰し、東洋文庫に寄附されて現在に至つてゐる。下郷共済会所蔵の「広橋文書」(本稿では今後は単に「広橋文書」と記す)は、恐らく右の移動の際に広橋家に残された部分であり、東洋文庫の蔵書と相補うものである。